

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

江戸指物の挑戦「継承と新境地」

益田 大祐 東京都／江戸指物職人

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催：レクサス)は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりに応援

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏(建築家／東京大学教授)、ゲエナエル・ニコラ氏(デザイナー)、清川あさみ氏(アーティスト)、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト)／アート・プロデューサー、下川一哉氏(意匠・匠研究所)らをサポートメンバーに発足。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。

昨年夏、レクサスギャラリ―高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。本当に欲しくなるプロダクトか? 「地域のオリジナリティーはあるか?」「コンセプトやターゲットは明確か?」など、サポート



エリア・コンサルティングにて
左:益田さん、右:下川氏

トメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約1年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。
1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、

セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出す。うとしているレクサスのブランド思想の一つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。今回は、東京都選出の匠、江戸指物職人・益田大祐さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。



1月18日、プレゼンテーションにて



スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

地域性と独自性のあるデザインを

本来は「個」を主張せず、シンプルで機能的なデザインが好まれる江戸指物だが、益田さんの作品は、葛飾北斎の浮世絵「富嶽三十六景」の一つ「神奈川沖浪裏」の巨大な波をモチーフにしたデザインのインテリアランプだ。

実はこの作品ができるまでには大きな葛藤があった。プロジェクト参加当初は、江戸指物らしい八寸の箱型の鏡台



完成プロダクト「波akari(なみあかり)」
北斎の「神奈川沖浪裏」の大波がモチーフ。



作品をプレゼンする益田さん

をモダンに仕上げて若い女性に提案したいと考えていた。だが、プレゼンテーションでサポートメンバーの生駒氏から「女性には少し使いにく

い。男性用にしてはどうか」とアドバイスされた。そこで、男女兼用のコレクションボックスに変更しようと考えたが、納得のいく形にならなかった。そこで、いつそこれまでの指物のイメージを崩す作品に挑戦しようと考えたのだ。益田さんが工房を構える東京都墨田区は北斎の生誕の地ということもあり、北斎の大波をモチーフに、指物の技術を駆使してインパクトのあるインテリアランプを作ることに決めた。

一番苦労したのは、波の初めと終わりのバランスだ。タモ材をほぞ組みの技術でつなぎ、鉋で美しい木目をなめらかに削り出して、「ザブーン」という音が聞こえてくるような波の躍動感を表現した。ランプシェード部はヒバ材を薄く削り出したもので、明かりが点くと木目が透けて見え、「赤富士」をイメージさせる。益田さんは「明かりを入れると雰囲気は柔らかくなるので、その変化を楽しんでほしい」とこづ。



北斎生誕の地でもある墨田区の象徴・隅田川

受注生産の殻を破る作品を提案

江戸指物職人として19年のキャリアを持つ益田さん。江戸指物の伝統を受け継ぎ、和家具、箱物、茶道具、神具などを顧客の注文を受けて作ってきた。「ほとんどが受注生産な



作品への思いを語る益田さん

江戸指物のすばらしさは使えばわかってもらえるし、価格にも納得してもらえらるが、一見ただで箱物の鏡台に惚れ込んでもらうのは難しい。葛飾北斎ならば、日本人だけでなく世界中の人が知っているし、江戸指物のイメージを裏切るこのインテリアランプならば多くの人の心をつかむことができる。と益田さんは考えた。実際、プレゼンテーション会場の展示ブースでは多くの人が足を止め、大胆なフォルムや木目の美しさに注目していた。

「これまでは東京・墨田の地で江戸指物の伝統を守ることが第一に考えてきたが今後は新しいデザインの作品や、今回のプロジェクトで出会った違う分野の匠たちとコラボレーションした作品を作り、セレクトショップなどの

戸指物の実演を行ってきた。日本だけでなく海外も視野に、江戸指物と東京のモノづくりの隆盛をめざす益田さんの挑戦は続く。



仕上りの肝となる鉋がけ

ので、お客様の顔を見て話を聞きながら、予算や要望に合わせて満足していただけるものを作るのが職人としての喜びだった」と話す益田さん。「レクサスのプロジェクトに参加し、個人ではなく不特定多数を対象にした作品を自分から提案する難しさと面白さを知ったことで、自分自身が大きく成長した」という。



益田 大祐
東京都／江戸指物職人

東京都練馬区生まれ。育英工業高等専門学校工業デザイン科卒業後、家具製造会社に就職するが、江戸指物と出会い退社し江戸指物渡邊に弟子入り。2005年独立。2009年墨田区に移転し、墨田区伝統工芸保存会に入会。歌舞伎役者の楽屋鏡台、茶道具や普段使いの小物など幅広く制作。修理・修復なども手掛ける。受注生産を主にしつつ、セレクトショップやイベントなどでも品物を販売。



展示ブースでバイヤーと話す益田さん